

# I 乳児の気質と発達に関する研究

## 1) 行動様式質問紙(1-2か月児用)の検討と標準値

前 川 喜 平 (慈恵医大小児科)  
副 田 敦 裕 (       "       )  
横 井 茂 夫 (       "       )  
庄 司 順 一 (母子保健院)  
吉 野 伸 (都立荒川産院)

### 研究目的及び研究方法

母子相互作用を考える上で乳児の気質の特徴は重要な役割を果たすと考えられる。我々は乳児の気質の他覚的評価法を標準化し、乳児の発達の理解を深めると共に、乳児健診などで本法を利用し、母子相互作用の円滑発展に役立てることを目的として本研究を行なった。

我々はCareyのInfant Temperament Questionnaireを参考にして1-2か月児用行動様式質問紙を作成し、前回に引き続き各カテゴリースコアの標準値を求めるため、新生児のデータ50項目と質問結果をコンピュータに入れ、いくつかの条件による新生児の気質の違いを比較検討した。

### 対象及び結果

国立大蔵病院、都立荒川産院で出生した乳児で1か月健診時に母親に質問紙を記入してもらい回答を得た758名である。この中から妊娠、分娩、新生児期に特に異常を認めなかった日齢30日から44日までの259名の1か月児を正常児群とした。乳児の気質的特徴として、表1の様に、活動水準、周期性、反応の強さ、反応性の閾値、自発性、人への反応性といった6つのカテゴリーを取り上げ、正常児群に対する標準値を求めた。

次に幾つかの条件の違いにより、気質の相違を比較してみた。出生順位別にみると(図1-A)の様に、第2子、第3子の方が周期性が規則的で人への反応性が高いといった傾向がみられた。また性別では、女児の方がやや人への反応性が高いといった傾向がみられた。

次に1か月児における母親の育児の難易についての印象により比較してみたところ(図1-B)

の様に育児が大変であるとしたものが周期性は不規則で自発性、人への反応性は低い値を示した。また母親の自由記述による1か月時における児の性格については(図1-C)の様に、おとなしいとされた児は、活動水準が低く、周期性が規則的で反応の強さがおだやかといった傾向を示し、他方短気とされた児は、活動水準が高く周期性が不規則で、反応の強さが強いといった傾向が得られた。

次に1か月時における体重増加量による検討を行った。1か月時における体重増加が良好な群の方が、より規則的で自発性が高い傾向が認められた。また児の問題として新生児期に仮死・嘔吐・呼吸障害などを認めたものは、活動性がやや低い傾向がみられ、SFD児に関しては周期性が不規則で反応の強さ、自発性が低い値を、反応性の閾値が高い値を示した。次に1か月健診時において境界及び異常と評価されたものと、特に問題点を認めなかったものとの比較では(図1-D)の様に問題なしとされたものの方がより規則的で自発性が高いといった結果が得られた。

### 結 語

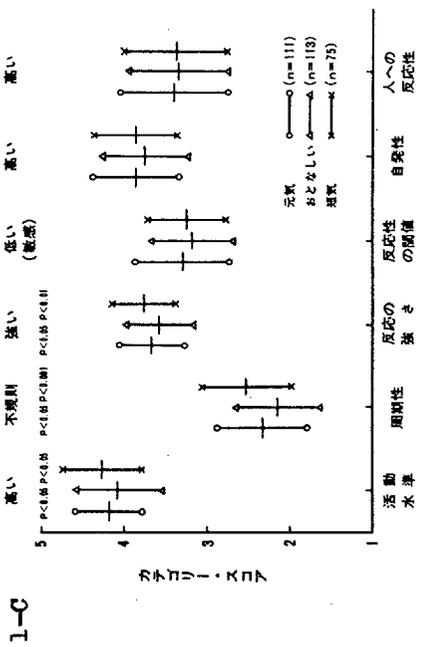
1か月児の気質的特徴について、1-2か月児用行動様式質問紙を用いて各カテゴリースコアの標準値を求め、幾つかの条件の違いによる気質の検討をおこなった。これらの結果よりこの質問紙は乳児の気質的特徴を比較容易にとらえるのに有用であると判定した。またこの質問紙は、母親に記入してもらうものであるため児にもつ印象なども反映しているものと考えられる。またこの事は、いいかえると乳児をみていく上で母子関係の中での乳児の気質的特徴といったこれまで考慮さ

れることのなかった角度から児をみていくことも重要であることを示していると考えられる。今後この行動様式質問紙を用いて乳児の気質的特徴を

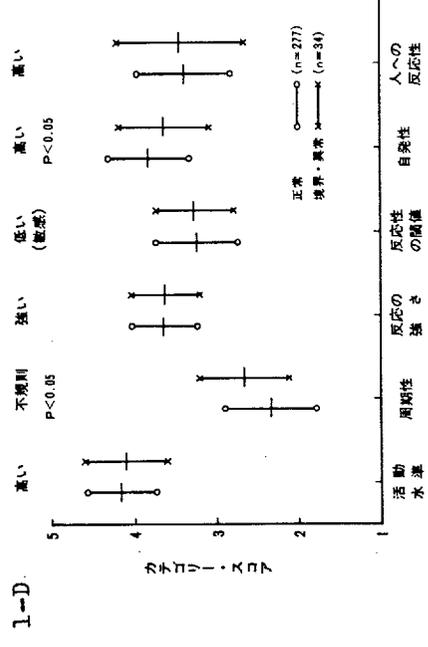
とらえて乳児健診、育児指導などをおこなうことは有用であるとおもわれる。

表1 正常児群の各カテゴリー・スコア  
(n=259)

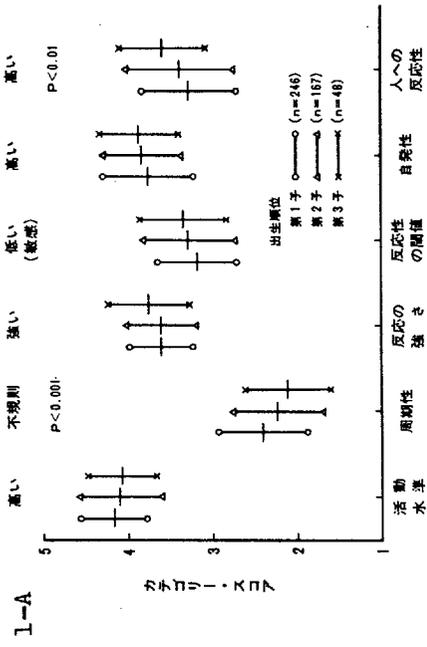
	活動水準	周期性	反応の強さ	反応性の閾値	自発性	人への反応性
平均値	4.13	2.31	3.64	3.26	3.82	3.33
標準偏差値	0.45	0.56	0.40	0.50	0.52	0.61



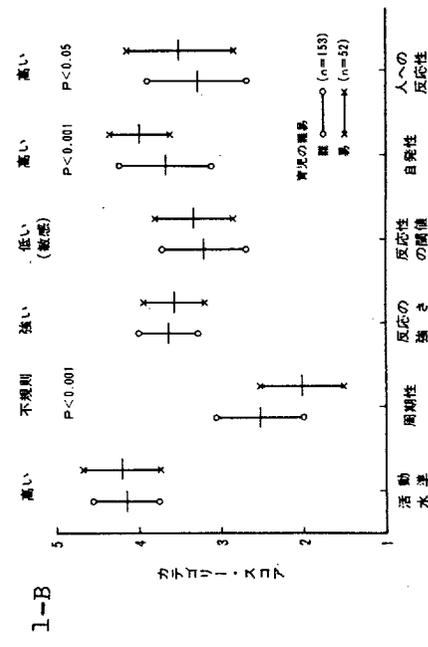
児の性格による比較



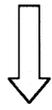
1か月健診時の評価による比較



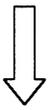
出生順位による比較



育児の難易による比較



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 研究目的及び研究方法

母子相互作用を考える上で乳児の気質的特徴は重要な役割を果たすと考えられる。我々は乳児の気質の他覚的評価法を標準化し、乳児の発達を理解を深めると共に、乳児健診などで本法を利用し、母子相互作用の円滑発展に役立てることを目的として本研究を行なった。

我々は Carey の Infant Temperament Questionnaire を参考にして 1-2 か月児用行動様式質問紙を作成し、前回に引き続き各カテゴリースコアの標準値を求めるため、新生児のデータ 50 項目と質問結果をコンピュータに入れ、いくつかの条件による新生児の気質の違いを比較検討した。